さっちゃん

菜乃香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さっちゃん

【Ｎコード】
Ｎ３１００Ｂ

【作者名】
菜乃香

【あらすじ】
あなたは、幽霊に『さっちゃん』という子がいるのを知っているでしょうか。この物語は、稲椎讒訴という人が『さっちゃん』について語る、というお話です。ジャンルは一応ホラーですが、ＳＦ、その他にも十分入ると思います。

初めまして。（前書き）

お待たせいたしました。
『命日』ともどもお世話になります。

初めまして。

初めまして。

私は讒訴(ざんそ)と申します。稲椎(いなしい)讒訴です。ふふふ、変わった名前でしょう？

この話を語る物でございます。どうぞ宜しくお願いします。

それでは自己紹介も終わったことですし、本題に入ることにしましょう。

さっちゃん…あなたはこの名を聞いたことがありますでしょうか…？

…ない？

今、知らない。と言いましたか？

そうですか。知りませんか…。

残念です…。

…ん？なんですか？

そうですか、そこのあなたは『さっちゃん』を知っていらっしゃいますか。

いやぁ～、珍しいですね～！

それだったらあなたには、今私が呟いた言葉の意味がお解りになったでしょう？

なんだか私達、気が合いそうですね。大変嬉しく思います。

えっ？…なんのことだ？

嫌だなぁ～。この行から調度7行前の言葉ですよ。

……。

やっぱりあなたもお解り頂けませんでしたか…。

いえいえ、あまり気にしないで下さい。

実はこういうの、結構なれているんで。

…意味を教えろ、と？

ふふふ、意外とせっかちなんですね。

教えてあげたいのは山々なんですが…あえて言わないでおきますね。

まあまあ、そう怒らないで下さい。

私の話を最後まで聞いてくれればお解りになることです。

どうせまだ『さっちゃん』のこと、何もお解りになさってないのでしょう…？

でも、ここが私の話のいいところ。どう捕らえるかはあなた次第ですが。

先に忠告しておきましょう。

私の話が、謎のまま終わってしまっても決して怒ったりしてはいけません。

こんなに危険なことをしようとしている私です。何も保障は出来ません。

どうか、みなさんにも影響が出ないよう祈りながら語っていくことにしましょう…。

初めまして。（後書き）

どうでしたか？
讒訴の意味なんですが、悪く言って人を訴える。という意味です。
この人にぴったりだと思ったんで…。
意見、感想などお待ちしています。
なお、投稿が1週間ほどあくときがあると思いますがご了承下さい！

冗談

まず、『さっちゃん』の代表的なお話をしておきたいと思います。

ある学校の休み時間のことです。

3年1組に、怖い話をみんなに話すことが大好きな、女の子がいました。名前は、彩音(あやね)ちゃんといいました。

今日も、彩音ちゃんはみんなに怖い話をしようと声を掛けました。

「怖い話聞きたい人この指と～まれ！」

はい！　はい！　いつものように、次々と集まってきます。

みんなも、彩音ちゃんが話す怖い話を聞くのが楽しみでした。

「今日は『さっちゃん』っていう子のお話だよ。

…でもね、この話を聞いた人は夜寝る前にバナナを書いて、枕元に置いてから寝ないと大変なことにな　るんだ～。

それでも聞きたい？」

クラスのみんなは少々戸惑っていましたが、うなずきました。

「…じゃあ、話すね。

『さっちゃん』っていうのは、小さい頃お母さんに足首を切り落とされて死んじゃった女の子のことなんだよ。

髪の毛は短くて、目はギラギラしてて、口が裂けてるの。
夜中に、この話を聞いた子の足首を片っ端から狩落としていくんだって～。大きな斧で。
でも、『さっちゃん』はバナナが嫌いだから、絵を置いておけば助かるって話だよ。」

「…じゃあ、大変なことってもしかして…。」

クラスの女の子がおそるおそる聞くと、彩音ちゃんは言いました。

「そうだよ。寝てる間に『さっちゃん』が来て、足首をもらいに来るんだよ。」

あなた達から見れば、ただの作り話や噂話にすぎませんよね？

私も最初はあなたと同じ考えでした。

確かにそれは、みんなの怖がる顔が見たくて言った女の子の冗談でした。　最初はね…。

キーン　コーン　カーン　コーン…　キーン　コーン　カーン　コーン……

チャイムが鳴っているにもかかわらず、『さっちゃん』の話題で持ちきりの生徒達は座ろうとしません。

そこに先生が入ってきました。

冗談（後書き）

勘違い

「ほらほら、みんな席に着きなさい。山野さん、怖い話をするのは結構だが、チャイムが鳴ったら座るようにして下さいね？」

先生は５０歳のベテラン教師で生徒にもよく好かれていました。

山野というのは、彩音ちゃんの苗字になりますな。

「はぁ～い！　ごめんなさい。」

そしてこの日の夜のことです。

彩音ちゃんの話を信じ込んでいた…というより、『さっちゃん』に来て欲しくなかったクラスのみんなは、枕元にバナナの絵を置いて寝ました。

皮が半分むけているバナナ…何個もつながっているバナナと、それぞれ違います。

なんとも可愛らしい絵ですね～…おっと、これは失礼しました。

しかし、これで油断してはいけません。

バナナを書いて寝なかった子が１人いました。

誰だと思います…？　　そう、彩音ちゃんです。

『作り話だから…』とか、『信じてないから…』とか思っていたのでょう。

その時の彩音ちゃんの気持ちは誰もわかりません。

ただ、彩音ちゃんはなにか勘違いをしています。

『さっちゃん』は、本当にいるんです…。

彩音ちゃんは、ふと目が覚めました。

時計を見ると、まだ夜中の2時。

…そのとき、どこからともなく歌声が聞こえてきました。

小さな女の子の透き通るような歌声…。

歌声

どこからともなく聞こえてくる歌声を耳にしながらも、彩音ちゃんは声が出ませんでした。

勉強机とタンスが置いてあるだけの殺風景な部屋の中に、こんな歌がコダマしました。

「♪…『さっちゃん』はね、…祥子(さちこ)っていうんだ　…ホントはね。」

…あなたもこの歌を聞いたことがありますね？

何を隠そうこの歌は、このお話から出来た歌なのです。

そこで彩音ちゃんは、顔1つ動かせないことに気付くのです…。

金縛りですね。

（だ、誰っ？）

彩音ちゃんは恐怖を隠そうと、『さっちゃん』が来たことを確信したくありませんでした。

部屋の真ん中に敷いた布団に、薄い掛け布団を掛けているだけの彩音ちゃん。

『さっちゃん』がどこにいるのか確認したいのに、体が動きません。

「♪…だけど」

ズズッ

「…ちっちゃいから、」

ズズズッ

「…自分のこ、と　…さっちゃんって」

ズッ　ズズッ

「言うんだよ。」

歌がどんどん近づいてくるのに、姿を確認することが出来ません。

そのとき、やっと彩音ちゃんが重要なことに気付きました。

（…ズズッ？ってなんだろう…。）

あなたはもうおわかりでしょう。

この奇妙な音は、さっちゃんが体を引きずってはってくるときの音なのです。

それに気付いた彩音ちゃんは必死に抵抗し、体を動かそうとしますがまったく動きません。

瞬きさえ出来ないのです。

（こ、殺されちゃうよ…。まだ死にたくない！）

そう思った瞬間、首が動くようになりました。

寝たまま横を向いた彩音ちゃんは、凍りつきました。

だって彩音ちゃんの目線の先には、ギラギラと光った目がこちらを直視していたのですから…。

耳元まで裂けた真っ赤な口は、ニタ〜　と笑っていました。

いいなぁ…。

彩音ちゃんは、『さっちゃん』の姿を目にして頭の中が真っ白になりかけました…。

「♪おかしいね、さっちゃん……。
…お姉ちゃんは…おかしいと思ぉう？」

『さっちゃん』は歌い終わると、ギラギラと光る目を近づけ問いかけました。

「……。」

当然、彩音ちゃんは返事をしません。　声が出ないからです。

「…なんでおかしいの？　足が…ないからぁ？
…お姉ちゃんには足があるんだねぇ。　いいなぁ…。
さっちゃんもほしいなぁ…。
…もらってもいい？」

（やだっ！　あげないよ！！！　ちょっと…何、それ…もしかして……）

そうです。　斧です。

『さっちゃん』は小さな体で大きな斧を持ち上げました。

そこにはすでに　真っ赤な液体がこべりついていました。

次の瞬間――――――…　ザクッ

「お姉ちゃんありがとぉ♪」

こうして、朝になってお母さんが起こしに来ると、彩音ちゃんは何者かに足首を切り落とされて死んでいる。

…というのが、『さっちゃん』の代表的なお話のようですね……。

しかし、『さっちゃん』はどうして死んだのでしょうね？

気になりますでしょう？

しょうがないですね、では次回は『さっちゃん』の死因をお教えいたしましょうか…。

楽しみにしていて下さい。

死因

さぁさぁ、大変おまたせ致しました。

前回も言っていた通りですが、『さっちゃん』の死因についてお話するとしましょう。

そもそも『さっちゃん』というのは…なんですか？

…いいから死因を教えろ？

ハッハッハッハ！

いやぁ…、あなたには参りました。　とても私の好みでございますよ。

…？　あぁ、変な意味ではございませんよ、クックックックッ…。

そこは古い…というより、ボロボロな2階建てアパートでした。

アパートの1階、1番奥の小部屋にその女の子は住んでいました。

『さっちゃん』。

本名は『祥子』。5歳の幼稚園年中。

父、母と3人家族で、とても素晴らしい家系だったのにもかかわ

らず突然の離婚となり

今は祥子と母の2人でとても貧しく暮らしていました。

母は、祥子にだけは…幸せになってほしい、…辛い思いをさせたくない、と強く思っていました。

が、働きすぎた母は酷く痩せこけ、やつれていき、

終いには祥子に　虐待　を加えるようになっていきました。

それでも祥子はお母さんが大好きだったので、

アザが出来ようが深い傷が出来ようが、幼稚園に通っていました。

先生が　「さっちゃんその傷どうしたの？」と聞いてきても、

祥子は　「転んでね、すべり台にぶつけちゃったの　！」と言うだけ。

誰もが虐待にあっているのではないかと思いましたが、

祥子は明るく振舞うだけで、決して本当のことは誰にも言いませんでした。

……それは怖いのではなく、純粋にお母さんが大好きだからでした……。

つとむ

そんな祥子に、よく話しかけてくる男の子がいました。　名前はつとむ君です。

「さっちゃん、また顔が青いんだねぇ。目も腫れてるよ？大丈夫ぅ？」

つとむ君はとても優しく、次第に友達が減っていた祥子にとって唯一の話し相手でした。

ある日のお弁当の時間に、祥子が大好きなバナナを食べていると、つとむ君が寄ってきました。

「さっちゃん、今日もご飯バナナしか持ってきてないの？…ボクのお弁当あげる！」

こうして祥子の楽しみはつとむと一緒に食べるお弁当の時間だけになってきました。

はい、どうかしましたか……？

…さっちゃんはバナナが嫌いなはずだ？

ハハハ、あなたの言うとおりでございますよ。

確かに、さっちゃんの対処法はバナナです。

ところが、さっちゃんの歌の2番には…

♪さっちゃんはね　バナナが大好き本当だよ
　だけど　ちっちゃいからバナナを半分しか食べられないの
　可愛そうね　さっちゃん

という歌詞になっているのです。

バナナを見ると、仲良しだったつとむ君のことを思い出してしまう……。　だから殺せない。

こうだとしたら、全てのつじつまがあうでしょう？

おっと肝心なとこらで止めてしまいましたね……。

どこかって？

とぼけていないで下さいね？

さっちゃんが死ぬところですよ…。

最終虐待

祥子が幼稚園の帰りのバスから降りても、いつものように母の姿はありません。

そんな状況でも、祥子は家まで走って帰ります。

「ママ！　ただいま！」

狭い六畳一間の空間に電気も点けないで、缶ビールを片手に母の姿はありました。

もうあの母の面影は少しも残っていません。

「……ねぇ、さっちゃん…。」

「？…なぁに？」

「さっちゃんさぁ～…、ここのところ毎日つとむ君にお弁当分けてもらってるんだって？」

「うん！　そうだよ！　つとむ君のお弁当おいしいよ―――」

「冗談じゃぁないわよぉっ！！！　あんたねぇ、どれだけママが苦労してると思ってるのぉ？！」

母は机をバンッと叩いて怒鳴りました。

―――5歳の子に何を言っているのか、と正直思えます。

「ごめんなさい…。」

「…そうだわ。さっちゃんの髪の毛を…切れば……」

「？……髪の毛切るの……？」

祥子の髪の毛はこの頃、ストレートロングのさらさら髪でした。

「そうだよ…。じっとしてなさい…！」

そういうと、母は立ち上がり台所から刃先がベトベトになったはさみを持ってきました。

…ジョキ……

ジョキジョキジョキジョキ……。

…髪の毛が祥子の周りに散乱していました。

青あざだらけで、腫れぼったい顔。長さはそろっていないベトベトの髪の毛……。

誰が見ても祥子だと思えませんでした。

「……あんたがいなければ……」

「……ママ……？」

———自分で産んだのではないか、せめて私がそこにいたらそう言いたかったですね。

「あんたがいなければぁぁっっ！！！」

母はそう唸(うな)ったかと思うと、大きなタオルで包んでいた何かを取り出しました。

…何だと思います？

タオルをめくると長細い棒が出てきました。

そしてその棒の先には何やらときらりと光るとがったものが……

そう、釜(かま)です。

母はそれを祥子の足めがけて振り下ろしました。

手遅れ

ふと気がつくと赤く染まった部屋に、その女は立っていた。

手には血がべっとりとこべりついた斧、そばにはベタベタなはさみ…そして目の前には自分の娘。

たった一人の愛しい娘　祥子　　。

両足から大量に出血し、白目をむいたままピクリとも動かない祥子の姿を見て初めて母親は恐怖を覚えた。

と同時にその場に泣き崩れた。

あぁ、この人は大変酷いことをしてしまった。

なんて哀れな「さっちゃん」でしょう……。

……？　　そうでもないみたいですね。　想像して下さい。

「さっちゃん」がおこっている…。

……ピクッ……

母親は顔を上げた。

「…おかあ…さん……お…かあさ……ん？」

母親は悲鳴をあげた。

祥子は起き上がった。しかし、その目から生気はまったく感じられない…。

学園七不思議「さっちゃん」の誕生である。

「み…みて……おかあさん…どこもいたくないよ……ありがとう……。なん…でそんなに…ふるえてるの…？どこかいたいの…？」

祥子は母の手から落ちた斧を手に取り続けた。

「……まっててね、これで足を切れば…いたくなくなるんだよ……。」

最後の最後、母の顔色は真っ青だった。

そしてそれから一週間後、アパート1階奥の部屋から両足のない女の遺体のみが発見され、

女の両足と祥子の行方がいまだにわかっていないという。

「さっちゃん」の童謡歌詞3番

♪さっちゃんはね　遠くに引っ越すって本当かな
　だけど　ちっちゃいから　僕のこと忘れてしまうんだよ

悲しいな　さっちゃん

その通りだと思いませんか？

それとこの「さっちゃん」の歌　最初に歌っていたのは　つとむ君だったそうです。

さようなら。

さて、「さっちゃん」のことを語り明かしてきた私ですが、もうそろそろお別れの時がやってきたようです。

「さっちゃん」はまだこの世を彷徨っていらっしゃいます。

そして、どこからかやってきて足を持っていかれるのです。

あなたもお気を付け下さい。

私のようになってしまいますよ？

……どういうことかって？

あなた様は最後の最後まで質問が多いお方ですな。

「私はこの世に存在していません。」

生徒の山野彩音さんに「さっちゃん」の噂を聞いて、信じず殺された担任の教師です。

私は殺されましたが、この世に未練が残りこうして話を聞いてくれるあなた様のようなお方を探していたのです。

もう一度言います。

私は稲椎讒訴。いなしい　ざんそ　……そんざ　いしない　存在しない。

お解りでしょう……。

私は成仏することが出来ます、あなた様のおかげで……。

それでは　さようなら……

さようなら。（後書き）

今まで読んで下さりありがとうございました！！！

次も宜しくお願いします☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3100b/

さっちゃん

2010年10月10日03時23分発行